



日本記者クラブ記者会見

2004年2月25日

「イラク」が全てではない

ラクダール・ブラヒミ 国連事務総長特別顧問

イラクの暫定政府作りに奔走する
ブラヒミ国連事務総長特別顧問が

日本記者クラブで記者会見を行ったのは2004年2月25日。

偶然にもその前日にはアナン国連事務総長が会見を行ったばかり。

「原則を重んじるだけに信頼感は抜群」(司会者)というブラヒミ氏の会見は
「イラクは“問題の一つ”にすぎない」という冒頭発言で始まり
「アフガニスタン、アフリカ、イスラエル・パレスチナも忘れないでほしい」
と強調した。

対イラクの武力行使は「正当ではなかったと今でも思っている」

と信念を述べる一方で、

その結果と戦後復興については「事実は事実」という
「現実派」としての一面ものぞかせた。

冒頭発言

きのうは国連事務総長がこちらにうかがったと思いますが、多分こちらにいらっしゃる全員の方がそちらの方にもお出かけいただいたのではないでしょか。また、事務総長のメッセージもお聞きになられていると思います。

国連というのがどういう機関なのか、どういう問題があるのか、どういう大望を抱いているのかとか、また希望ですか、それあります。また、いかに日本と協力ができるかといったようなことについても、国連としていろいろ考えてあります。共通の目的を、お互いに協力し合って達成していきたいと思っております。平和と安全を世界中で確かなものにしていくというのが目的です。事務総長はそういったことをきのうお話ししたと思います。

それからまた、最も直近の、国連が機関として抱えている懸念もしくは問題、関心というのはイラクの問題でございまして、これは最も国連がいま心を碎いている問題のトップの中に入る問題の一つであります。

しかし、イラクの問題だけがすべてではないのです。事務総長もおっしゃったと思いますが、各地にそれぞれ問題があります。もちろんイラクは非常に重要です。イラクの国民にとって重要なことですし、また、中東という、世界でもセンシティブな地域全体にとっても重要なことです。また、全世界の人々にとってもイラクの问题是重要です。しかしイラクの問題だけが唯一すべてではないのです。

アフリカも、もちろん大きな懸念対象であり、国連も心を碎いています。国際社会はアフリカにもっと注目を払うべきだと思っております。また、疫病や貧困の問題もあります。事務総長も申しあげたと思いますが、いろいろな不幸や災難というのはあります、やはり

そのルーツの問題というのがあるわけで、中東においてもイラクだけが唯一の問題ではないということです。

ほかにも問題があります。イスラエルとパレスチナの間の紛争です。これはおそらく、世界が最も心配しているもの、即ち国際テロという観点から考えたところのルーツにある問題ではないかとも思います。

アフガニスタンを忘れないで

それから、私が特に気にかけている問題といたしましては、アフガニスタンもあります。私はアフガニスタンには一月までおりましたが、いろいろな人々が「アフガニスタンを忘れないでほしい」と言っておりました。

なぜなら、以前にも国際社会がすっかりアフガニスタンのことを忘れてしまったことがあったのです。そして、忘れてしまつたために払われた代償は非常に大きなものになってしまいました。ご存じのように、ソ連の侵攻があったときに、アフガニスタンは本当に勇敢にソ連を相手に回して戦ったわけです。そして、この国が解放されました。もちろん、それに協力したのは中東の地域であり、アメリカでもあったわけです。

しかし、残念ながら、ソ連が敗北した後、国際社会全体（特にアメリカ）が突然アフガニスタンに背を向けてしまったわけです。そして、もうアフガニスタンは重要な問題ではない、というふうに片づけてしまいました。

深刻な麻薬問題

私は、まずアフガニスタンの国民の手助けをしたいと思いました。97年、98年、99年、自国の問題が解決できるようにということで協力しようと思いました。そして、そのときに何度も申しあげたのは、アフガニ

スタンのような小国、貧しくて、本当に遠くにある孤立した地域ではあるけれども、あのような紛争を放置して、見捨ててしまうということは、それなりの結果、影響が出てしまうということあります。2001年年の「9・11」の前においても、もう結果が出ていました。それは麻薬の問題です。

ご存じのように、アフガニスタンは西欧で使われている麻薬の九〇%を生産しています。特に近隣諸国は本当にそれで苦しんでおりました。つまり、アフガニスタンで国家が存在していなかったということで、そのかわりに銃だ麻薬だということになってしましましたので、被害をこうむってしまったわけです。

パキスタンも、たしか三百五十万から四百万、五百万ぐらゐの麻薬中毒者であふれてしまったのですが、これもアフガニスタンの問題を放置した末に払わされた代償でした。おそらく現在でもカラチだけでも、100万丁の銃が不正を犯す人たちの手に渡っているわけです。

イランの場合は、政府の公式統計によりますと、大体150万人の麻薬中毒者がいるということです。300万だという説もあるのですけれども、こういった状況があったので、本腰を入れて麻薬対策に当たっている。そして、闘争で200人、300人の人たちが命を奪われてしまうとか、麻薬マフィアとの抗争に巻き込まれて命を失う人もたくさんいるということです。

ですから、アフガニスタンのような問題がありますと、その悪影響はアフガニスタンの国境を超えて近隣諸国にとどまらず、さらに波及してしまう。麻薬網を通して西欧も旧ソ連も侵されてしまうということになるわけです。もしかしたらこちらの方にも、もういま向かっているかもしれません。もちろん、9・11を契機として、テロに対しての戦いも始まっているわけです。

ですから「グローバル化」というのは、コカコーラとトヨタを売るだけの話ではなく、さまざまな意味合いをはらんでいるということです。紛争も放置しておくとグローバル化してくるのです。今後とも日本が国連に対して寛大な貢献をなさってくださることを願っています。

日本の貢献は大きい

そして、第三世界の人たちも、日本の助けを必要としています。ぜひ日本も寛大であり続けられるように、そして、アフガニスタンのような国を忘れていただきたくない切に思っております。

日本に感謝することはたくさんあります。緒方代表に対しても感謝申しあげたいですし、日本は常にアフガニスタンのことを気にかけてくださっています。97年、98年、99年当時、私は絶望で退任してしまったのです。アフガニスタンにだれも注目してくれないと、あきらめていたのです。しかし、数少ない国の一つとして日本は常にアフガニスタンに注目してくださった。何かやらないといけないと常におっしゃってくださいましたし、貢献もしていただきました。

98年、99年には、アフガニスタン復興についての支援国会議を、日本で開いてくださったのです。そして2001年、2002年後の状況を受けまして、結局、2002年の1月22日に復興支援会合が東京で実際に開かれたのです。世界には本当にまだたくさんの懸案の問題があります。

日本は、国連にとって重要なパートナーのお国のです。事務総長も、日本でお会いした方々といい会合ができたと、多分きのうおっしゃったと思います。小泉総理ともお会いしましたし、川口外相ともお会いいたしました。

それからまた、光栄にも事務総長は国会演説もさせていただいたわけです。事務総長の今回の来日は、改めて国連と日本の協力関係を再強化したものになったと思います。

さて、最後に当たりまして、個人的な観点から申しあげたいことがございます。佐藤大使（佐藤行雄日本国際問題研究所理事長・前国連大使）に私、心から謝意を申しあげたいと思います。

それから、国際問題研究所の会合にご招待いただいたことにも感謝している次第です。三日間、こちらにうかがっておりまして、本当に佐藤大使におかれましては、個人的な時間をたくさん私のために割いていただいたところで、とても感謝しております。おかげさまでとても有益な時間を過ごすことができましたし、快適な滞在をしております。

*****質 疑 応 答*****

伊藤芳明（司会：毎日新聞）：私が国連をカバーしていたときに、亡くなられたデメロさんとプラヒミさんの比較というのを聞いたことがあります。デメロさんは非常に現実的な方で、それに比べてプラヒミさんは非常にプリンシプルというか、原則を重んじる方で、それだけに信頼感がある。ですから、プラヒミさんがアフガンに行かれると決めたときに、数多くの国連職員の方は、彼の下で働きたいというので、自発的に職を志願されたということを聞いております。

いまのお話も非常に原則にのっとって、アフガン情勢などをお話しいただきましたけれども、きょうはその原則も、もう少し柔軟に、イラクから、アフガンから、国連から、いろんな質問に答えていただけると思います。

イラク：直接選挙の可能性と条件

後藤康浩（日経）：今月初めにプラヒミさんがイラクに入られて、直接選挙の可能性というものを調査され、その結果として、今回の6月までの権限移譲までには直接選挙の実施は難しいという結論を出されて、これをイラク各派勢力が受け入れたということで、今回のプラヒミさんの調査は、イラクの今後の安定にとって大きな貢献だったと、私は感じております。

その一方で、直接選挙というのは自由で公平な選挙ということで、イラクの民主化にとっては今後欠かせないものだと思います。直接選挙の実施について、今回は難しいということでしたが、今後、どのような条件が整えば、また、今後どれくらい先になると、直接選挙がイラクでも可能になるとお考えでしょうか。

プラヒミ：おっしゃるように、私どもは本当に忙しい一週間をイラクで過ごしました。そして、そのフォローといったしまして、報告書がイラクの人々及びイラクを占領している連合国の方に送られております。この報告書は、全員に公開されていて、うれしく思っております。

内容は簡単です。そのリポートが申しあげているのは、イラク国民自身が6月30日までに直接選挙を行うことは不可能だということを受け入れたということなのです。それが第一点です。

第二点はすべてのイラクの人々が、主権をイラク人の手に早く戻してほしいと願っているということです。先延ばしにしましょうとか、主権の移譲はもうちょっと先送りしましょうというふうには、イラクの国民はだれも思っていないわけです。

ですから、我々が提案したのは、主権の移譲と直接選挙は切り離して考えようということだったのです。主権の移譲は6月30日までに行われます。そして選挙の

方は、その後、できるだけ速やかに組織するということなのです。事務総長がおっしゃったと思いますが、事務総長としても、この準備作業については一助となりたいということですから、即刻準備作業が始まれば、年末もしくは来年早々にも、直接選挙も可能になるのではないかと思っているところです。

イラク攻撃は誤りだったか？

高畠昭男（毎日）：私もあなたの貢献によってイラクに安定が戻ったことに対して称賛したいと思います。また、アフガニスタンに対する貢献に対しましても称賛の意を表したいと思います。

いろいろな報道によりますと、あなたは必ずしもイラクにおける武力の行使には賛成しておられなかった。あなたはいまでもイラクのサダム・フセインの政権に対する武力の行使に関しては反対していらっしゃるんですか。また最も公正な国連のファシリテーターとしての役割はどうなんでしょうか。また、イラクとアフガニスタンの状況をどのように比較されるでしょうか。特に武力行使に関しましては、どのように二国間の状況をとらえていらっしゃるんでしょうか。

プラヒミ：私は、イラクに対しての武力行使については、とても反対でした。これは明確に申しあげます。いまも考えは変わっておりません。正当な戦争ではなかったといまでも思っております。現在も以前もそうですけれども、サダム・フセインの体制は、イラクにとっても、また地域にとってもよくなかったことは確かです。いまもそうなのですが、問題となっていた体制が変わったのであれば、それはいいことだというふうにも思っております。

ただ、やり方について、外国の介入でなく、そして世界最大の勢力の介入がない形でそうあればよかったということで私の考えはいまでも変わっていないわけで

す。でも、実際に戦争になってしまったということであり、事実は事実であります。

いまは、国連の気持ちとして、イラクの国民の助けになりたいと思っています。そして、イラク国民に主権が戻ってくることを願っております。国連として得意としている仕事の分野であると思いますし、まさにそれをやるためにつくられた機関が国連だと思っているのです。

国連はいろいろないいものを持っておりますが、その一つは、1950-60年代を通じて植民地主義に終止符を打つということで、世界中に貢献できたことです。国連が再び、この時期、イラクの人たちが主権の移譲を受け取ることができるよう働くというのは、極めて適切なことであると思っております。

アフガニスタンとの比較

さて、イラクとアフガニスタンを比較するといったしますと、アフガニスタンにおいては、タリバンに対して武力を行使するということについては、具体的に決議のお墨付きを得たわけではなかったけれども、その行為自体は、満場一致で世界の世論にサポートされておりました。オフィシャルなレベルで組織内においても、また一般世論においてもそうです。

というのは、アメリカ人も抑圧されていると感じたわけです。世界もそのように感じた。タリバン体制が全く協力を拒否してきたわけです。そして、責任のある人たちを追跡すること、侵攻者を追跡することを拒否してしまったということがありました。

第二に、アメリカは、あの国については占領しているわけではありません。アメリカが一人で行ったのではなく、連合としてやったということで、アフガニスタンについては別に占領行為には発展していなかったわ

けです。

そして、国連が音頭をとって世界会議（ポン会議）を主催いたしました。その結果、アフガニスタンの政府が樹立されるに至った。その政府がいま主権を持っているわけです。これがアフガニスタンとイラクの大きな違いだと思います。

大内佐紀（読売）：もう一つ、アフガニスタンとイラクを比べて質問させていただきたいと思います。昨日の報告、事務総長の報告によりますと、5つのオプションがあったということあります。暫定政権としての選択肢として5つあるということで、アフガニスタンにおきましても、ロヤ・ジルガ・タイプの国民大会議のようなものがより望ましいオプションであったのでしょうか。

プラヒミ：事務総長も国連も、別にこのオプションが好ましいといった覚えはないと思います。選択肢について述べておりますけれども、現在、テーブルに出てるもので、イラク国内で検討されているものを挙げたということあります。2～3ヶ月以内に起こってほしいと思っていることは、そして、この6月30日までに起こってほしいと思っている展開は、イラク国民の間でディベート、討論を行っていただくことがあります。そして、何が一番ベストの方法なのかということをイラク国民自身に決めてもらいたいと思っております。私は調停役とはいわないまでも、触媒役として役割を果たして、そういう討論が進みやすいようにはかっていきたいとは思っております。

統治評議会のみならず、その他のいろいろな勢力があります。政治的な人物とかグループがありますが、こういう人たちも一緒に巻き込んで、統治評議会に入っていないような人たちも幅広く巻き込んだ形で、全国を挙げてイラクで向こう2ヶ月ぐらいに大きな討論が沸き起こってくることを願っております。

それが進むべき道だと思っておりますが、ロヤ・ジルガ方式の国民大会議をするというのであたら、もちろん国連もそれに応じることができるし、それを組織することもできると思います。この点については、アフガニスタンすでに経験を積んでおります。

経済制裁は正しかったか？

董沢嘉雄（日経出身）：第二次世界大戦後のアメリカの日本の占領統治は非常にうまくいったのですが、イラクの場合、それがうまくいかないのは、どういうところに原因があり、それをどういうふうにしたらよろしいのでしょうか。それから、国連の問題についても、フセインの時代に国連がイラクに経済制裁を加えたというので、イラクでは国連の評判が非常に悪いという話も聞いております。そういう中で、国連がどういうふうにして役割を果たせるのでしょうか。

プラヒミ：まず最初に、後段の方からお答えしますと、国連は制裁ということについてはいい気分ではなかったのです。10年間もずっと経済制裁がイラクにかけられてしまった。これでイラクが疲弊してしまったわけです。

国連の機関（FAO、WHO、UNHCR、ユニセフなど）は、どの機関も、専門機関も、イラクで働いていたような人たち、国連ファミリーの人たちが何度も、この制裁がイラクの国民を打ちのめしていると、みんな言っていました。イラクの政権は痛くもかゆくもない、ということを言っていたわけです。だから、我々は制裁をかけるということについては、いい気分ではありませんでした。

国連に働いている官吏は、かなりの程度、居心地が悪いと思っていたわけです。制裁が、国連の名でかけられる一方で、その結果として生じる苦境をどうやって軽減したらいいかということも国連が同時に考えてい

たという、奇妙な状態に陥っていたのです。つまり、国連が悪いのだ、制裁がかかったのは国連のせいだ、というふうにイラクの人たちが思っていたわけです。

ただ、イラクの人々も、私も含めた国連で働いている人間と、制裁を決議した国連加盟国とは別ものであると考えてもいるのです。

ですから、事務総長と働いている国連の人たちは、今後もイラクの人たちを支援していきたいと思っています。こうした支援は、全く偏見なしの独立、中立な立場で行われるということです。

事務総長が、きのうお話しになったと思いますけれども、我々がイラクに出ていくときには、独立した機構として行くわけです。目指すところはただ一つ、それはイラク国民を支援するということです。

イラクで起こったことと日本で起こったことは、日本の米軍占領時代のことをよく知りませんので、ちょっと比較できませんので、私にはイラクと比べることはできません。

ジョセフ・コールマン(A P): イラクの人たちの中には、6月の主権移譲前に選挙を望んでいる人たちがいますが、このような要求に対してどのように対処するでしょうか。

プラヒミ : イラクの人々が何を言っているのか、細かい点までは分かりませんが、大半として、6月30日前に選挙ができるはずだといったような風潮があった。我々はイラクに実際に参りました、幅広く、深く突っ込んだ形で学者や専門家の方と話をしてみました。そして、選挙ができるかどうかということについて調査したわけです。

結論としては信頼に足り得るような選挙は、6月30日

前までは無理であろうということを申しあげました。何百人もの人と話をしたのですが、結局、多分選挙は6月30日までは無理だろうという声が大半であったわけです。

稻田信司(朝日) : 最近の国連の報告書は、その中で、独立したイラクの選挙委員会を設立するべきであると書いてありますが、自主的な独立性のある委員会を設けるためにはどのような手続きが必要でしょうか。また、国連の役割としては、このような制度をつくるには、どのようなことが果たせるでしょうか。

プラヒミ : これは選挙を準備するに当たって好ましいと国連が考えている道筋の一つあります。政府からも政党からも独立して、自主的に独立した形でやっていけるのであれば、そういう機構が望ましいということになります。そうすれば、自由で公正な選挙が実現可能になるのではないかと思っております。

ただ、これは一つの方法にしかすぎません。例えばイラク国民が内務省がやるべきだというのであれば、それはそれで結構であるかもしれないからです。こういった選挙管理委員会をつくるということは、国連も過去においていろいろな国でやってまいりました。一番最近のところでは、アフガニスタンでもやっています。

ですから、我々の持論としては、もしこの方向で行こうという総意があるのであれば、国連としてはもちろん支援いたします。そして、いろんなリソースを提供します、という立場です。

自爆テロはなぜ続くのか?

最首公司(中日出身) : プラヒミさんはアルジェリアの出身ですし、イスラム教徒の心情もよくおわかりだと思うんですが、サダメ・フセインが拘束された後も、アメリカ軍に対する、あるいは最近ではイラク人自身

に対する攻撃が続いている。特に自爆テロという、自分の生命を投げ出してでも攻撃していく。この辺のところはどういうふうに解釈されるのか、なぜこういうことがイラクで起きているのか、その辺を説明していただければと思います。

プラヒミ：私がアルジェリア人であって、イスラム教徒であるということを一つとて、イラクの問題を全部語れるというわけではありませんし、イラクの答えを出すこともできません。だから、短いお答えとしては、全然わかりません、ということなんです。

一体だれがこういった暴力ざたを起こしているのか、全く私にはわかりません。これは国家を挙げての抵抗だ、レジスタンスだと呼ぶ人もいるし、テロだという人もいます。もしくは政府を転覆したい反対勢力がいるんだ、といったような言葉もあります。

でも、常識的に考えると、いろいろなグループがいて、それぞれ異なるグループが入り乱れているということだと思います。そして、暴力的な事件を起こしているのだと思います。でも、十分知識がないので、しっかりお答えできないということです。ご存じのように、国連自身も大きな攻撃を受けて犠牲者が出ています。スタッフが何名も亡くなりましたから、本当に我々にとっても深刻な懸念事の一つです。

新しい国連決議の可能性は？

西村卓也（道新）：新しい決議が安保理によりまして採択される可能性はどうでしょうか。イラクの安定にかかわる採択です。日本の自衛隊は役割を果たすことができるでしょうか。人道援助のみならず、治安の問題に関しましても、日本の自衛隊は役割を果たせるでしょうか。

プラヒミ：安保理の中で討議がすでに始まっています。いつ決議が必要となるのか、ならないのか、6月

30日までに必要となるのか否なのか、もしくは6月30日明けてから早々必要になるのか、こういったことに答えるべく安保理内でもすでに討議が始まっています。どっちの方向に進むかはまだ結論は出ていないと思うんです。

日本の自衛隊派遣の話でありますけれども、これについても、十分事態を知っておりませんので、コメントすることができません。ぜひ、日本側の方々にお聞きになってください。しっかりとしたお考えがあると思いますので。

国連報告書のイラク分析

高橋弘行（ＮＨＫ）：報告書を読ませていただきました。大変すばらしい報告書でした。八月のバグダッドでの爆破事件以降、国連を取材していて、非常に国連の中が混乱していることを感じましたが、この報告書は極めてすばらしい報告書だと思いました。作成者のイラクの内政に関する分析と自信が感じられました。

そこでうかがいたいのですが、この報告書をつくるに当たって、シスター師や、あるいはガバニング・カウンシルや、いろんなところから聞き取りをされたと聞きましたけれども、これだけの報告書をつくる際に、どの意見が一番イラクの本当の姿を反映しているのか、どの意見をもってこの報告書をつくる自信を得られたのかという点。

さらには、この現状で統治評議会が必ずしもイラクの国民の意思を反映したものではないといわれ方をしています。また、統治評議会の中でも意見の対立があるといわれています。そうしたことをもって、いま現時点での統治評議会をどう評価しておられるのか。

また、これからいろんなプロセスを進めるに当たって、国連はどこを中心に活動をしようとしておられるのか、

その辺をお聞かせください。

プラヒミ：この報告書作成に当たっては、先ほど申しあげたかと思いますけれども、何百人の人たちからヒアリングを行いました。人数を実際に数えたわけではないんですけれども、同僚によると、六百人だ、四百人だという説がいろいろあるんですが、何しろたくさんの方からヒアリングいたしました。統治評議会のメンバーとも話しましたし、グループとしても二回お会いしました。別個に何名かの個々のメンバーの方ともお会いいたしました。もちろん統治評議会に入っていない人たちの話を聞きました。

政治、宗教、また部族、いろいろありますから、いろんなセクトの人たちの話を聞いたわけです。私は幸運にもシスタニ師と二時間半、じっくりお話しすることもできました。ほかにも宗教的な指導者とも話しました。スンニ派の人たちですとか、いろんな宗教セクトの方々ともお話しすることができたわけです。女性グループの方とも、青少年グループとも、また新聞社の編集者の方々ともお話しいたしましたし、大体二十名ぐらいの新聞の編集者ともお会いすることができました。できるだけ広範に話が聞けたと思ってあります。

ただ、それでも十分ではないのです。報告書に書いたかと思いますけれども。シスタニ師とはナジャフでお会いしたわけですが、モスルとか、クルド人が住んでいるところとか、バスラとか、行きたかったのですが、治安の問題もありましたし、時間の制約がきつかったということで、今回はそれがかなわなかったのです。

石黒穣（読売）：イラクと離れたところの質問で、プラヒミさん、かつてはハイチの特別代表も務められたということで、現在、ハイチ情勢は非常に難しい状況になっています。これを解決するオプションというのはそう多くなく、限られていると思うんですけども、どうした解決方法というのが一番レコメンドできるも

のなんでしょうか。アリストイド大統領の退陣なども含めて、お考えを聞かせていただけるといいのですが。

プラヒミ：確かに、おっしゃるように、私は国連のハイチ特別代表を九四年、九五年、九六年、務めておりました。ハイチで起こっていることを見てわかることは、ある国が本当に深刻な問題に陥ってしまう。国際社会は即効薬を求めてはいけないということです。ハイチが如実な例だと思うのです。我慢強く、辛抱強くやるべき作業があるということ、それなりに時間がかかるということです。その国が地に足をつけてしっかり立てるようになるまでには時間がかかるということです。

ハイチについては、今までやったことはまだ不十分ということです。不十分だったからいまのような展開になってしまったわけです。これは大きな教訓だと思います。国連も、また国際社会もしかと受けとめて、反省の一つにしたいものだと思っています。介入をするのであれば、ちゃんとその仕事が終わるまで抜け出ではいけないということです。貫徹しなくてはいけないということです。

アフガニスタンについても同じことがいえます。いつたん始めたら、物事が終わるまでうっと面倒を見るということです。

ハイチの最近の状況については、十分私は知識がございませんので、例えば大統領が退任すべきかとか、そういうことについて、具体的にいまコメントはできません。ほかの人たちが担当しておりまして、私の個人的な所掌範囲ではございませんので。

イラク分裂の可能性は？

柳沢亨之（読売）：イラク北部のクルディスタンの状況

はどのように理解していますか。大体二百万人の人たちが北イラクにおける陳情書にサインをしたというふうに聞いております。国民投票をしたということですけれども、どのように思っていらっしゃるでしょうか。イラクが分断しないかどうかをどのように思っていらっしゃるでしょうか、クルド人のことも含めてお話しいただきたいと思います。

プラヒミ：イラクの国内にいる人たちも、また地域の人も、世界の人も、イラクが分断することは望んでいないと思います。そんなことが起こってしまえば、地域全体が不安定になってしまいます。長きにわたって不安定な状況が続いてしまいますので、私としてはほかの方と同様に、イラクの統一が守られることを願っております。そして、そのために国際社会が支援をする、そして団結が維持されることを望みます。

もちろん、クルド人地域に住んでいる人々は、独立を望んでおります。ただ、現実をよくわかっているクルド人も含めて、いろんな人々は、それは不可能だということがわかっています。それがクルド人の利害にもかなわないということを十分認識しているわけです。だからこそ、連邦制をクルド人と一緒に望んでいるということをいっています。そして、クルディスタンはぜひイラクの一部としてとどまってほしいというふうに、私どもは思っております。

コンセンサスとはいいませんが、満場一致といったような形で、本当に国際社会も、イラク自体も、その方向を目指すことが正しいと感じているはずです。イラクを分断させてしまう、分離させてしまうというなどという人は現実が全くわかっていない人たちです。そして、地域の人たちの利害にかなわないということがわからない人たちだけだと思います。

イラク民主化の方向

道傳愛子（NHK）：あなたのお立場としては、常に将来に関しましては楽観的でならなければいけないと思うんですけども、現在のイラクの状況を考える、また民主化を推進するということに関しては、彼らとしては、民主主義につきまして、また言論の自由につきましては、十分に理解されていないと思うのです。人によりましては、やはり公正な選挙を行うのは非常に大変なことだということでありますけれども、そのような意見についてどのようにお考えでしょうか。

プラヒミ：おっしゃるとおりだと思うんです。つまり、自由で公平な選挙を主催することは、イラクにとっては大変な課題です。イラクは三十五年にわたる独裁によって、もう疲弊しきっています。三回ひどい戦争がありましたし、いまや外国の占領下に置かれているということですから、環境的には、この自由で公正な選挙を準備する環境にはないということです。本当に深刻な問題をはらんでいる中で、公平で自由な選挙を行うというのは大変な難関です。

イラク人がはっきりといっているのは、容認可能な選挙にしたいということです。最初からベストで、最も自由で、最も公平な選挙は望んでいないということです。一朝一夕にはそんなことはできないということは、十分国民としてはわかっているわけですから、とりあえずは容認可能な選挙にしようということです。そして、その選挙の結果としても、理にかなった形で国民の大半が受け入れ可能なものにしましょうということを目指しているということです。

ご質問者が正しくおっしゃったように、それでも大変な課題なわけです。特に治安の問題を考えますと、いまの状況はひどいものですので、もっと治安状況を大幅に改善しなくてはいけません。

川崎剛（朝日）：私が興味を持っておりますのは、アラブ人の心情です。サダム・フセインが拘束されたとき

には、アラブの方たちは侮辱されたと感じたとも聞いております。一般的アラブの人たちは、どのようなイラクをもたらしたいと考えているのでしょうか。どのような民主主義を求めているのでしょうか。

プラヒミ：ご質問者のおっしゃった点は正しいです。サダム・フセインが拘束され、髪の毛を引っ張られた形で写真に載ってしまったというのは、いいイメージではないです。本当に心からフセインを嫌っていた人たちも、あの写真はひどいじゃないか、というふうにイラクの人たちがいっていました。それは確かです。

ただ、アラブの人たちの気持ちということになりますと、彼らはパレスチナで起こっていることに、より強い見解を持っているわけです。パレスチナの人たちは苦しんでいるということ。そして、国際社会はそれについてほとんど沈黙を守っているわけです。何もいわない。そして、国際社会の重要な部分がパレスチナの人たちに強いられている不公正かつ不正義な取り扱いに沈黙を決め込んでいるということで、とても深刻にアラブの人たちは受けとめています。

イラクで何が望まれているか。それは平和を回復することです。治安、安定、そして統一と団結を回復するということです。

しかし一方では、イラク人は、こうした事柄についても不安を感じている。というのは、イラクの人たちはずっと長きにわたって失望をきわめていたということ。独裁体制に置かれていたということでイラク人が苦しんでいるときに、国際社会は眞の同情を示さなかった。そして、占領軍が入ってきてる現在、平和や治安をイラクに取り戻すために、十分な支援をイラクにしていないと思われているという現状があります。

通訳：池田薰、高野雅子

文責・編集部